044　百里が岳　080620

◎遠敷峠（833M）の上まで車でやってきた。5 年半前、澤山さんの通夜の日に衣川さんと来た。その時と同じコース、遠敷峠で車を止め、百里が岳、木地山峠、上根来村、根来坂峠、遠敷峠と反時計回りに回った。今日は同道の方の体力しだいで同じコースが無理なら、引き返す予定だった。

◎「麓からの　登山口　小入谷越（502M）調べておこう」と車を走らせたら、すぐに見つかった、次回是非。

◎大阪では、何日か前から夏のような暑さの日が続いていた。同道は、相澤・前川さんだが、暑さ対策に凍らせた飲み物、凍らせた果物を持ってこられた。道中は雲一つない空模様だったが、峠に来ると、うっすら曇っている、風もある、肌寒い、「長袖のシャツ一枚では　寒いが　歩けば暖かくなるか」とそのまま出発。

◎尾根道歩きとはいえ多少の高低差はある。小声で、「えにやこら」汗が出る、冷たい風が心地いい。

◎9:30 に出発して、11:00 に百里が岳（931M）にやってきた。「朝が早かった　腹が減った　飯にしましょう」おかずをたくさんいただき、旨い昼飯、旨い果物。「これはまだ　凍っている　あとで」百里が岳は、このあたりではポコリン背が高い、小声で、「えにやこら」で登った。人が多い、団体もいる。空がまっさおだ。

◎千メートルにも満たない江若境は、尾根でも木がたくさんある。今の季節、緑が空に向かってどんどん広がり、空を覆いつくしている、木洩れ日の量も少ない、山の中も薄暗い。ところどころに樹のない空き地がある、風の通り道なのか、樹が育っていない。左右の景色が望める、低い山々が連なっている。

◎木地山峠に近づいたところに白い岩がゴロゴロ。石灰岩かな。白い石は、若狭駒にも、伊吹にも、鈴鹿にもあるね。木地山峠に向かってどんどん下る、尾根道は雑木林、陽の勢いが増してきた、多少暖かくなってきた。

◎木地山峠（658M）12：50　小さい祠がある、ここも何度か来ている。「同じ道を帰るのは　つまらない」というので、上根来に向う。かつて、この峠道は、木地山村の人たちには、小浜の都会に出る大事な街道だった。

◎5 年前の記憶ではすぐに上根来の集落に着いたように覚えていたが、コースタイムでは 1 時間半になっている。小さい谷筋の渡渉を 2,3 回、「すぐだ　すぐだ」と歩いていたが、崖があり道が無くなった。「あれれ　こっちかな　いやこっちかも」そうこうするうちに、やっとわかりづらい踏み跡を見つけた。

◎水嵩の多くなってきた川を何度か渡渉した、「ヒルはいないかね」と思っていると、「バサッ」と耳元で、黒い影が飛び去って行った。「なんだ　あれは」何度も見まわしたが影も形もないけれど、これを三回もやられた。ヒヨドリぐらいの大きさの黒い鳥だと思うのだけれど、こちらが注意していると襲ってこない、すごいねえ。

◎山の中、ヒノキの皮がペロリ剥がされている樹を十本ぐらい見た。このあたりの樹には紐や網が巻かれていない、白や青のテープでぐるぐる巻かれている杉や檜をよく見かけるが、このあたりにはそれがない。まだ剥がして間がないという感じのきれいはな幹の中身が見えている、爪痕のようにも見られる。熊か鹿か。

◎ネット情報では、最近、熊のカワハギが増えてきているという。杉や檜の皮を剥いで、幹の表面を歯でこすり取って喰っているらしい。上根来の斜面にはいくつか、ピンクのリボン付き熊探知装置があった。有刺鉄線で熊の毛をからめ取る「クマの調査」というものがあった。こんなものでわかるのかねえ。峠のあたりが源流の谷筋をどんどん下っていくと舗装道路に出た。昼を過ぎると気温が上がりだしたのか、山を下ってきたからか、暖かくなってきて、長袖のシャツでちょうどいい。

◎谷筋を降りてくると上根来村（328M）の舗装道路に出た。横の草むらで休憩して、融けた果物などをいただいた。舗装道路は、小浜と梅の木を結ぶ道路、これを行けば遠敷峠まで行ける。5 年前は崖崩れで福井県側が不通だったが、今は通行が可能らしい。

◎2：30 に遠敷峠に向かって出発。上根来の村には入っていないが、おそらく過疎がどんどん進んでいそうな村じゃないのかな。前方に峠に向かって舗装道路を行くと、「鯖街道　京」と書いた標識があり、そのまま山の中に入る。5 年前は、「えんやこら　いたく　疲れた」と思ったが、今日はまだまだ快適だ。この登山道はなだらかで、サバを担いだ職人たちにも優しかったかもしれない。滋賀県側の斜面はもっと急だったように思う。崖崩れが補修され道に車が通れるようになったせいか、この登山道も人が少なくなっているのかもしれない。

◎5 時過ぎ、遠敷峠に到着。湯を沸かし、コーヒーを煎れ、5:30 出発。車で 2 時間半、帰宅。

045　万葉集　090620

先日来、古事記の話、本居宣長の話、言葉の話、言葉を表す字の話が続いた。読み書きしている今の言葉や文字、日本人だ、日本語だ、と疑うこともなく日々使っていた。漢字が入ってくるまでの日本人、古墳時代や弥生時代、難しい言葉のやり取りで会話が成立していたものだと思われるが、会話は成立しても、その伝達、その記録はどうなっていたのか、それが無いとは、不思議なことだ。言葉のこと、文字のことで、今まで知らずに生きてきた基本的なこと、仕組みなり、時間の経過がわかってくる。昨日も聞いた、通夜の席で坊主が読むお経、これには木魚や鉦が伴奏についている。先日動画で見た、アイヌのお姉さんたちが語る英雄伝説の昔話、これもなにかを叩いてリズムを取り、それぞれに、「むにゃむにゃ」が聞こえてくる。語り、訴え、うなる、「むにゃむにゃ」には、意味や言語、意志や願い、という最も大事だと思われる部分よりも、「むにゃむにゃ」唱え、謡い、舞う作業のほうが大事、むしろその作業が本質で、意味や言語、意志や願い、なんてものは無視し、その作業の没頭する心意気、気持ちのほうが大事だったんでなないだろうか。むしろ我々現代人は、理屈や説明や方程式にとらわれすぎ、「むにゃむにゃ」がわからなくなっているのかもしれない。ということで、万葉集を読んでみると、この話の中の、「むにゅむにゅ」「むにゃむにゃ」それなりに味わい深い。

高橋虫麻呂という人は知らなかったが、千葉の市川、真間の手児名、と聞くと若かりし頃を思い出す。ともに遊んだ、仲野さんは、亡くなったというニュースは聞かないが、なんだかもうおぼつかない。

鶏が鳴く　東の国に　古に　ありけることと　今までに　絶えずいひける　葛飾の　真間の手児名が
麻衣に　青衿（あおくび）着け　ひたき麻（を）を　裳（も）には織り着て　髪だにも　掻きは梳（けず）らず
沓をだに　はかず行けども　錦綾の　中に包める　斎（いは）ひ児も　妹にしかめや　望月の
足れる面（おも）わに　花のごと　笑みて立てれば　夏虫の　火の入るがごと　湊入りに　船漕ぐごとく
行きかぐれ　人の言ふとき　いくばくも　生けらぬものを　なにすとか　身をなた知りて　波の音の
騒く湊の　奥つ城（き）に　妹が臥（こ）やせる　遠き代に　ありけることを　昨日しも　見けむがごとも
思ほゆるかも

柿本人麻呂が岩見国の現地妻と別れての長歌。　下は、近鉄吉野線から、下つ道に住む妻が死んだあと。

岩見の海　角の浦廻（うらみ）を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ　よしゐやし
潟はなくとも　いさなとり　海辺をさして　にきたづの　荒磯（ありそ）の上に　か青く生（お）ふる
玉藻沖つ藻　朝はふる　風こそ寄せめ　夕はふる　波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄る
玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈（やそくま）ごとに　万度（よろづたび）
かえり見すれど　いや遠に　里は離（さか）りぬ　いや高に　山を越え来ぬ　夏草の　思ひしなえて
偲ふらむ　妹が門見む　なびけこの山

天飛（あまと）ぶや　軽の道は　我妹子（わぎも）が　里にしあれば　ねもころに　見まく欲しけど
止まず行かば　人目をおほみ　まねく行かば　人知りぬべみ　さね葛　後もあはむと　大船の　　思い頼みて
玉かぎる　磐垣淵の　隠（こも）りのみ　恋ひつつあるに　渡るひの　暮れぬるがごと　照る月の
雲隠るごと　沖つ藻の　なびきし妹は　もみち葉の　過ぎていにきと　玉梓（たまずさ手紙）の
使ひの言へば　梓弓　音に聞きて　言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを　聞きてありえねば　我が恋ふる
千重（ちえ）の一重も　慰もる　心もありやと　我妹子が　止まず出で見し　軽の市に　我が立ち聞けば
玉だすき　畝傍の山に　鳴く鳥の　声も聞こえず　玉鉾の　道ゆきびとも　ひとりだに　似てしゆかねば
すべをなみ　妹が名よびて　袖そふりつる

046　安威川　100620
「安威川の　あまりきれいでない川で　鯉釣りをしている　おっさんたち」
おっさんは　毎日のように　ここに　来ている
三四人の　仲間のおっさんたちと　ここに来れば会える
自転車でここにやってくる　一番乗りのときもあれば　すでに誰かが来ていることもある
自転車を降り　荷を下ろし　さおを組み立て　針をつけ　餌をつける
ぽしゃり　第一投を投げるまでの楽しみ　仲間と話す楽しみ　時間が過ぎていく楽しみ

オレ　三十歳ころだったと思うが　三四回海に行った思い出がある
川田さんという方が　海釣りに行きましょう　と　誘ってくれた
なぜか　オレは道具を持っていたんだね　どこかで買ったんだね　どこかで使ったんだね
そういえば　ちょっと変なはなしなんだけど
釣り道具屋に行くのが　嫌だった　針を　糸を　おもりを　買いたかった
釣り道具屋のオヤジは　なにを釣るの　どこで釣るの　ときいてくる
そんなことはほっておいてくれ　竿と　糸と　針があればいい　針がなくてもいいよ
オレは　近所の港で糸をたれ　動いている小魚が　見れればいい　釣れればいい
なにを釣るの　どこで釣るの　そんなことはほっておいてくれ　とはいえず　釣り道具屋はいやだった

画材屋に行って　絵具を買いたい　という客が来たら　なにを描くの　どこに描くの　と聞くよねえ
オレは　バカだねえ　いこじなやつだねえ　あまのじゃくなやつだねえ

話はとんだ　くだらないぼやきを話してる

そうだ　海は　四国の　愛媛県　伊予のほうに連れて行ってもらった
車に乗っていったように思うが　どこで海を渡ったのか　覚えていないが　橋はまだ　無かった
若くて元気だった　疲れなど覚えていない　どこを走ったのかも覚えていない
船に乗って　岩の上にとび乗った　エンヤコラ　海の波は高いねえ
糸はこれをつけて　針はこれをつけて　えさはこれ　おもしはこれ　みんな教えてくれた
あそこに投げる　見えるでしょ　潮が　あそこがポイント　そう　うまいうまい
いくら見ても　見えない　潮など見えない　どこが潮　それでも　あそこといわれたところに　投げ込んだ
おおお　きたあ　また　きたあ　そら　きたあ
クーラーにいっぱい　釣れた　グレ　ブダイ・・宿で泊まって　飲んで　騒いで　寝たと思う
帰って　包丁で　魚をさばいた　三枚におろした　喰った　飲んだ

オレは走っている　おっさんのひとりが声を出す　こい　こい　こっち　こい
ほれ　みてみ　あれ　つがい　いつものやつ　こい　こい　こっち　こい
ほれ　みてみ　いつものやつ　きた　きた　きたぞ　おっさんのねこなでごえ
おっさんに　ふらふら　近づいているのは　カモ　シベリアに帰らない　カモ
オレは　おっさんの　ねこなでごえを　後にして　だんだんはなれていった
あとはどうなったのかな　かものつがいは　おっさんにビールを　飲ませてもらったかな
あては　なにがいいかな　今日は　発泡酒２本と弁当を持ってきた
ビールでなくて悪いね　ちょっと飲んで　あては　卵焼きはないよね　そらあいかんよね

047　ムクドリ　120620

ノア・ストリッカーNoah Strycker 著＜鳥の不思議な生活 The Thing With Feather＞

　著者紹介では、鳥がすきで好きで、世界中の鳥の観察に、フィールドワークに時間をかけているようなお方。テニス選手でもあり、フルマラソンも 5 回参加。鳥専門の学者でない分、話が面白い。

ムクドリの群れの不思議

◎ネットでムクドリを調べてみると、中国・モンゴル・ロシア東南部・朝鮮・日本などの東アジアに生息すると書いてある。本では世界各国、欧米での話がたくさん出てくる。これは別種:ホシムクドリのことだそうだ。

◎ホシムクドリ:オレ自身が、よく見かけるムクドリは、ずんぐり体系で、嘴と足がオレンジに近い黄色に比べ、ホシムクドリは黒い身体に白い斑点が雪のようの散り、ややスマートで格好がいい鳥のようだ。北アメリカ・ヨーロッパ・中央アジアに生息。集団就眠による騒音、糞害、果樹野菜への食害等で嫌われている。世界の侵略的外来種でもある。アメリカでは、1890 年ころ NY のセントラルパークに持ってきた 100 羽の子孫だそうだ。

◎オレも一二度見たことがあるが、ねぐらの大きな木の上空で、無数の彼らが乱舞する、乱舞ではなく一糸乱れることもなくスーイスイ飛び回る、この飛び方は壮観である。ほかの鳥もこういうことをする習性があるのかぐらいに思っていたが、この乱舞はムクドリ特有のものらしい。

◎ムクドリは夜になると集まる習性をもち、夏の終わりにはその数が数十万羽にのぼることがある。夕方、眠りにつく直前、ムクドリは塒の上空で、時には一時間以上にわたり巡回する。これほど密集し、統制の取れた群れをつくる鳥は世界でもまれだ。なぜムクドリがこのようなことをするのかは、まだはっきりしない。眠りに落ちる前に余分のエネルギーを燃焼させているのだろうか、入ってきたはぐれ者を案内しているのだろうか、捕食者を警戒しているのか。しかしこれが、壮大な光景であることには異論がない。

◎いかにして数十万羽の鳥が、互いに数センチしか離れていないなかで 50k/h で飛び、絶えず方向を変えながら、群れのまとまりを維持できるのかという不思議。科学者はこれを、「集団行動」と呼ぶ。

◎2007 年、イタリアの物理学者グループは、50 メーター間隔で置いた 3 台のカメラを空の同じ方向に設置して撮影した。研究者は時間をかけ、ムクドリの群れの写真を解析しアルゴリズムを開発し、「統計物理学　最適化理論　コンピュータービジョン技術の融合」だと述べた。8000 羽の群れをほとんど正確に処理しムクドリの群れの視覚化ができた。

◎ムクドリの群れにはリーダーがいない。群れが向きを変えるときは、鳥は同じ半径の経路を飛ぶ。それぞれのムクドリは同じ速度で同じ曲線を描く。軍隊の行進の曲線は、外側の兵士は速度が上げるが、ムクドリは兵隊のように速度を補正しない。群れの前方にいる鳥は、左旋回のあと右側に、右側の鳥は後方に、後方の鳥は左側になる。

◎まじかで見れば、ホシムクドリは美しい玉虫色の層を持つ羽毛で覆われ、黒い身体が光線の加減で緑や青に輝く。声帯模写の名人で 20 ほどの他の鳥の鳴きまねができる。ひなから育てるといいペットになる。モーツァルトは 3 年間飼っていたそうだ。ムクドリのさえずりを旋律に取り入れていると記されている。

◎ムクドリの飛翔、イワシの飛翔、これを数学的に、物理学的に、解析しようなんてことは想像もしなかったが、考えてみれば面白そうで、簡単なことかもしれない。数台のカメラ映像やら録音やらを、時間をかけて検証しているうちに、動きそのものが、音そのものが、捉えられそう。動物の動きなどはそう複雑じゃなし、何十かのパターンを捉えてしまえば、簡単じゃないのなんて部外者のオレが言えば、怒られるかな。アルゴリズムとはなんのことかなと調べると、物事の計算に、物事の解決に、どういう方法があって、どいう言う方法が一番合理的なのかということかな。オレに言わせれば、これはアカン、「もっと苦労して計算しなさい　もっと時間をかけて解決しなさい　そのうち　素晴らしいものが　出てくるかもね」

048　安威川　150620

◎今日も安威川に行けた、「行けた　毎日　行っているのでは・・？」と怪訝に思われるかもしれませんが、梅雨に入っての毎日、天気予報は傘マークが続いております。なんとか雨の合間を、ちょっとでも降っていない時間を、空模様をうかがって、「いまだ　それ行け　てな　感じで　行動しております」今年の梅雨は珍しく、梅雨いり宣言の翌日から、しとしと、じゃあじゃあ、降っているように思われる。

◎昼飯を食って窓の外をうかがうと、「お　降ってないかな　今のうちかな」慌て着替え、ねんのために雨具の上着を着こみ、家をとびだしたが、小雨がポツリと降っている。いつものコースを走り、いつものベンチまで帰ってきて、いざストレッチと上を見上げたら、昨日の奴が上空で止まっている。「おお　待っていてくれたのか気づかず失礼」

◎なんと連日、チョウゲンボウに出会うとは、うれしい限りである。探鳥に凝っておられるかんちゃんが、「おおやっと　猛禽に会われましたか　おめでとう」とメールの返信をいただいた。以前から、「猛禽類は　たくさんいますよ」といわれるが、オレの見るのは、カラスやハト、水鳥類、「猛禽類は　見つからない」と嘆いていた。

◎昨日も同じベンチのある場所でのストレッチ、跳んで、撥ねて、足を開いて、上にそり返って、下を向いて、なんてことをゆっくりやっている。これを毎日 20 分ぐらいやっていると調子がいい、山に登っているとき、足が攣ったりしない、と続けている。ふと見上げると川の流れの上空 10 メートル、こちらから 50 メートルぐらいの場所に、ハトかカラスぐらいの大きさの鳥が、羽を上下にゆさぶりながら静止している。「え　まさかひょっとして　初めての　猛禽かも」多少興奮しながら見つめていたが、やつめ、少し向こうに離れてまたもやホバリング、それからどんどん離れていった。

◎かんちゃんが、「猛禽は、ハトやカラスと違う　飛びかたが違う　精悍　尖鋭　スイスイと来て　スーッと飛ぶ」そんなことを何度も聞かされてはいたが、ハトのスピードも速い、カラスの羽音もなかなかのもの、カモの飛びかたも初速こそバタバタなれど上に舞い上がると速い速い。まして、今の季節たくさん舞っているツバメは速いし、ヒヨドリやムクドリもなかなかに速い。ホバリングをしていた彼、2,3 回ホバリングをして向こうのほうに去っていったが、その飛びかたは、なんだかバタバタ、ハトやカラスと変わらない。

◎帰ってすぐに、ホバリングと検索するとすぐに、「チョウゲンボウ」と出てきた。ハヤブサの仲間だそうで、ハトぐらいの大きさ、ハトを少しスマートにした茶褐色の鳥、ホバリングが得意らしく、ネズミや小鳥や虫を捕えるそうだ。比較的よく目にする猛禽類とあるが、はじめてお目にかかって嬉しい限りである。

◎今日もベンチに上着を置き、水を飲み終わって、見上げたら、奴がいた。昨日よりも近い、30 メートルぐらいかな、ちょっと右へ行って、また戻ってきて、二三度うろうろホバリングしながら左のほうに去っていった。彼の傍を小鳥が舞っている、近くではないが、小鳥たちはさほど恐れてはいないようだ。ホバリングは、羽をばたつかせながらも、頭は静止している。小さい目で地面が見えるのだろう。人間の目どころか、センサーの付いた、AI の付いた、精細な画像を頭に送っているのではなかろうか。鳥の目になって、地球を眺めてみたい、地面を観察してみたい、とオレはいつも思う。「鳥の目とは　こんな見え方だ」という発見はまだないらしい。

◎今年に入って、生活スタイルを変えた。「だらだら　アトリエで　絵をにらみつけない」「絵を描くのは　朝飯後の　3 時間ぐらい」「この 3 時間は　ほかの要事はしない」「昼飯を喰ったら　自由時間　がはは」「朝の 3 時間以外は　描かないぞ」このスタイルに決めて日が経つと、前よりも忙しい、前よりも楽しい。絵は新しい絵と、昔の絵の修繕、これを並行してやっている。並行とはいえ、なかなか違う作業をこなしていくのは難しいので、今日はこっち、明日はあっち、というふうに頭の切り替えができる程度に楽しんでいる。「モノ造りの人は　今が大事　現在進行形が　一番いとおしい」これはほかの人にも当てはまるのかどうか聞いたことがないのでわからない。オレが勝手にいっているのか、賛同者の拍手に会えるのか・・。そういうわけで、生活スタイルを変えたので、安威川に来ても、時間にゆとりをもって、のんびりしている。近作は、描き込まず、あっさり仕上げている。古いものは、重いぐらいの絵具を着けている。重いのは取れないので、白っぽい絵の具で軽くしている。

049　鳩 190620

ノア・ストリッカーNoah Strycker 著＜鳥の不思議な生活 The Thing With Feather＞知られざる鳩の帰巣能力

◎鳥は驚くほど方向感覚に優れている。鳥類学者のロナルドの実験は、英国の島から 2 羽のマンクスミズナキドリを飛行機でイタリアに連れだし放した。1500 キロを半月で飛んで巣に帰った。次の実験で、アメリカのボストン持ち帰り、放してもらった。半月足らずで、5000 キロの大西洋を越えて巣に帰った。ある種の野生動物も同じ本能があるようだ。アメリカで、移動放獣した数百頭のクロクマが元の生息地に帰った。アメリカ東部原産のコクチバスは遠く離れた場所に放流されても、お気に入りの淵に戻ることがわかっている。

◎1898 年フランスの軍用伝書鳩の専門家は、方向感覚、聴覚、臭覚、触覚、味覚、とは別の内耳にある器管に由来するとした。最近では、人と同様、視覚的目標、太陽、星、臭覚により方角がわかるのでは、さらに研究が高度になるにつれ、磁場、偏光、反響定位、可聴下音響などで、進路を見つけることが証明されている。

◎ハトは鶏より早く、5000 年前にはメソポタミアで家畜化されていた。軍事作戦や、ニュース伝達に利用された。オレが二十歳の時、朝日新聞の東京本社でアルバイトをしていた、屋上には伝書鳩小屋があった。

鳥の地図に対する感覚を確かめるために、さまざまな実験が紹介されている。

◎磁場を回転させ、大音量と閃光が出る箱にハトを入れ、遠くから放したが、巣に帰った。

◎ハトが都会の交差点を、90 度回転するのを見た。

◎ムクドリは、太陽の代わりにライトを灯すと方向を変えた。

◎ホオジロをプラネタリウムの中に入れると、星の中の回転の中心を見つけ、それに基づいて位置を知った。

◎ハトに目隠しをしたが、ぐるぐる回って巣に帰った。

◎ハトの脳の、磁気を伝える神経を切断したが巣に帰った。ハトの臭覚を伝える神経を切断したら、道に迷った。

◎鳥の臭覚は、特に海鳥は、匂いだけで、自分の巣を見つけ、つがいの相手を識別できることが知られている。ハゲワシは、空中の粒子のわずかな濃度も気付くことができる。

◎いろいろな調査で分かってきたこと。小型発信機が作られ人工衛星で追跡可能になった。

◎オオソリハシシギ：アラスカからニュウジーランドへ 11000 キロを 9 日間で飲まず食わずで渡る。

◎キョクアジサシはその名の通り、北極と南極を渡る。距離は 90000 キロ。

ここからは、オレのぼやき。研究者は、さまざまいろいろ実験している、まだまだわからないことがたくさんあるようだ。実験の方法が、「なんとく　だらない　事を」と苦笑するようなことから、あまりに専門分野すぎ、ちんぷんかんのところもある。

オレの目に映るのは、大海原の上を一直線に進む鳥が数羽、だからといって彼らはマシンではない。彼らを食料として狙うやつもいる。雨や雪、大風や竜巻、熱波に寒気、そんなことは織り込み済み。疲れないのか、それがどうした。腹が減らないのか、それがどうした。眠くないのか、それがどうした。

鳥だけに関していえば、彼らには行きたいところがある。何故そこに行きたいのか。行かなければいけないのか。行かないなら行かなくてもいいのか。行った先になにがあるのか。行った先を期待していくのか。こんなことは鳥とは全く種類の違うホモサピエンスだから口にする話なのだ。鳥にすれば当然の行動、当然の時間であり空間であり、「別種の生き物が　そういうことを疑問に思うとか　詮索　検索　したいとか　思い　考えること自体が　不思議な行動」と思っている・・かな。

渡り鳥が、人の目から見れば無謀な距離を飛ぶ、前回通過した地域もあれば、未知の場所もあるという冒険、栄養補給のための食料、恐ろしい敵、恐ろしい自然現象。そんなことを苦にもせず、彼らは当然のように行動する。鳥だけではなく生きもの全部が、普通に行動する。普通というのが、人にとって異常であったり驚きであったりするかもしれないが、ほんのささやかな普通であり、日常であり、当然なんだ。苦痛でも、重荷でもない。鳥が、海や山をすいすい飛ぶことが、彼らの生活なんだ。動物も昆虫もそうじゃないのかな。

050　ホシガラス　 230620
ノア・ストリッカーNoah Strycker 著＜鳥の不思議な生活 The Thing With Feather＞ホシガラスの脅威の記憶力
◎1805 年 35 歳の偵察要員:クラークは、現在のアイダホ州の渓谷を探検中、一羽の鳥に目を止めた。「私はキツツキの一種の鳥を見た　松かさを食べており・・」北米西部の険しい山中でその鳥を見たり聞いりする。
◎ここまで書いてネットで検索してみた。あれれ、この鳥知ってるぞ、山で見たぞ。「あ　あの鳥　なにい」「ホシガラスの　カンタロウ」なんて澤山さんと言いあっていた。信州:アルプス 3000M 級の尾根道を歩いていると、時々目の前を黒い鳥が横切った。ホシガラスという名だったのだ。地上のカラスよりはだいぶ小さいが、そんな場所でさっと横切る鳥を見てうれしくなったものだ。ただ温暖化現象のせいなのか、最近では麓のカラスが、アルプス 3000M 級の尾根道を、「カア～カア～」舞っていることがある。なんでカラスがこんなところに・・。

◎冬のさなか山頂で営巣する鳥はあまりいない。山の上は寒く強い風が吹き食料も雪の下では探しにくい。ほとんどの山地の鳥はもっと温暖なところで冬を過ごす。カラスと同属のホシガラスはかしこい。寒い季節でも山地で生き延び、繁栄する技を身につけている。
◎ホシガラスは、高地で冬を生き延びるために、餌を溜めこむ。この鳥は松の種子を食べる。初夏最初の松かさが熟すと、フルタイムで操業を始め、冬の初めまで種を集め続ける。頑丈なくちばしで松かさをこじ開け、舌の下の袋いっぱいに 100 個ぐらい持ち出す。すぐそばの地面や数キロ離れた地中に、3,4 粒づつ埋め込む。冬の初めまでに数万粒の松の種を、5000 もの別々の場所に埋め込む。ホシガラスは埋めた場所に印をつけるわけでもない。まして冬の間に風が吹き雪が積もる。信じがたいことだが、初夏までの間、空腹のホシガラスは自分の隠匿物質である松の種を大半見つけ出して食べる、その種で初夏まで生き延びる。

◎ホシガラスはどういう方法で埋めた松の種を探し出すのだ。あてずっぽうに探す。匂いを感じる。何らかの印をつける。頭の中に地図を作っている。先生方はまたまた、「なんと　くだらない　事を」と苦笑するような実験も含め、鳥が埋め込んだ種を、取り出したり、別の種を埋め込んだり、と活躍され、ホシガラスを観察された。
◎ホシガラスは、位置を覚えるのに空間記憶を利用していることを証明した。とはいえ半年前に埋め込んだ場所を細かく記憶している、記憶した地図を持っている、どういうことだ、これはすごいことだ。

◎「空間記憶」〈spatial memory〉　動物が餌の隠し場所、巣穴の位置、危険な場所、を特定するには、空間や場所を認知するのが空間記憶である。
◎生物の先生方「空間記憶」の話から、哲学が来た。哲学における、空間の考察は歴史が古い。真空、空間と物体、空間的位置の絶対性と関係性、空間の実存・・。
◎オレのつたない考察:「この空間の処理が・・」なんてねごとなりぼやきなりを、若い頃から何回もなんかいも繰り返し言ってきた。平面絵画というものは、〇〇センチ X〇〇センチの画面が絶対世界。「その絶対世界の中で色の面積を　ならべていくもの」絵画とはそういうもの。面積の配置の中には、空間も時間もないよね。なのに、「この空間の処理が・・」なんてことを言うのはおかしいことだけれど、面積の配置といってしまえば楽なんだが、絵画であり絵でありアートであるならば、その配置の道が問われ、より美しい道、より感動的な道、より衝撃的な道が要求される。「道　という言葉で　ごまかしてしまった」

◎若い頃によくぼやいた言葉に、「見えなくても存在するのだ」「存在することは絶対なんだ」「光や闇は現象だ」なんてほざいていた。朝が来てうっすら光がさし、オレの目にも、キミの目にも、ぼんやり向こうが見え始める。「おお　夜が明けてきた　恐怖の闇から　希望の夜明け　やっと　樹が見え　水が見え　山が見えだした」「おいおい　見えたからといって　樹や　川や　山は　在ったのではないのかね」「光がなきゃ　絵も描けない　写真も写せない」「在るものは　元来　もともと　在るのだよ」「見えるだけで　それは　えそらごとだよ」

051　大谷山　 250620
◎9：00 マキノ、メタセコイヤの並木の手前、森西村に車を止め、歩き出した。梅雨の中休みなのか、この 2,3 日、雲は多いが晴れている。「よし　行こう」と決め、いつものマキノ、赤坂山の手前の大谷山を目差している。
◎森西村は 5,6 軒の農家、水田がいくつか、家と水田以外の山々や森は金網の塀で囲まれ電気が通っているようだ。歩き出したら、「田屋城跡」の看板、獣除けの金網の扉を開け中に入った。
◎浅井氏と縁戚関係の田谷氏の城跡。登山道の看板に、「駒返し」「搦手：敵の背面を責める」いかめしい文字。
◎昔の林道のような登山道を 1 時間半。暑い、綿シャツを 2 枚着ているが汗ぐっしょり、ふ～ふ～である。どんどん高度を稼ぐ、晴れてはいるが雲の多い空模様、「明日からは　雨模様　荒れ模様」といっていた。
◎小川なのか道なのか、水の流れる石の上をばしゃり、泥の中をぐしゃり、靴が沈む、汚れる、「まさか　いないよね　ひる」きれいな水をすくって飲む、シャツが濡れるぐらいの汗、流れの水が旨い。
◎今回のルート、オレも上西さんも初めて、地図を頼りに、強い味方のスマホマップを頼りに。林道が終わると赤い印が少なくなってきた、人の踏み跡なのか、シカの踏み跡なのか。空が青くなってきた、晴れてきた。
◎ひょっとするとこの登山道は、かつての、マキノの村人の街道だったのかも知れない。「え　石が敷いてあるの」苔と土の間に見え隠れする石がある。小浜に通じる道だったかな。
◎またまたじゅくじゅく道、今日はヒルの姿を見ないのが不思議なくらいだが、梅雨の季節なので水量は豊富だ。川がある、「こいつを渡ろう」微妙な水量だ、二歩ぐらいで行けそうだけれど、靴の水が入るか否か、「ええい　それ」さいわいなことに靴の中に水が入らなかった。「ここを　登ろう」「登山道は　川に沿って　下流に　行くんだが」「地図を見ると　ここを登って　ショートカットできそう」「向こうの　尾根に　行けそう」
◎オレの不得意、危険な場所のひとつが、急な上り下り。ここの上りも何度か四つん這いになりながら登った。上のほうが明るい、「空だ　もうすぐだ　えんやこら」ふうふう言いながら尾根道に出た。道のないところだけれど、ここにも、人の踏み跡なのか、シカの踏み跡なのか、歩けそうな道がある。50 年前までは村人、杣人、山人がうろうろしていた里山のてっぺん尾根。今も植林の世話に、杣人が入っているはず。
◎バイケイソウ:ユリ科　盛んに白い花をつけている。有毒植物らしく、間違えて食べると死に至るとか。
◎尾根道を北に向かって歩く。左側の下のほうに、川と林道が見える。最初の予定では、原村がある原山林道を抜土まで行き、大谷山目指して徳島トレイルを歩く予定だった。眼下に遠く見えるあそこまで下り、また登り返すことを思えば、ここいることは極楽である。自然林の中、樹々の葉が濃くなり尾根道とはいえ多少薄暗い。
◎このあたりの樹の格好は、強風と積雪のせいだろうが、おおいにいじめら、なにくそおっとはね返し、下のほうで曲がりくねった「の」の字「ぬ」の字の幹を持つ巨木、横向けに生えやがて天に向かう樹、「まっすぐに　すなおに立っているモノは　いないねえ」根性の樹々たち、このようなほれぼれする樹の間を進む。
◎ＧＰＳがあればこそ迷わずに登山道に合流できた。さあここから大谷山に向かう。
◎大谷山に近づくと、「おおお　すごい　きれい」と腹の中で歓声。樹林帯から草原帯に変わり、目の前がぱっと開けた。ひざくらいの高さの草、ポコリンとしたところには、「どなたが　配置された」というような白い石庭ふうがある。向こうのほうに大谷山が、そのまだ向こうに赤坂山かな、左側は霞んだ日本海、右側もおぼろげに琵琶湖。森の中の樹林帯、樹々の呼吸の中を歩くのもいいが、とつぜん 360 度開ける展望も素晴らしい。
◎大谷山 813M　先ほどからの草原の中、太陽が身体に刺さり暑かったが、てっぺんは風がきついので汗が引いていく。ＩＣレコーダーはこの音がじゃましてオレの声が聞き取れない。
◎少し戻って降りるコースを歩き始めた。「おおお　ブナ林　ブナばかり」まっすぐ立っている若々しいブナの森、下草として生えているのが、緑色をピカリ光らせた葉っぱのイワカガミが密生している。ブナとイワカガミがずっと続く、「ほんとに　つづくねえ」またまた水の流れ、旨い、水筒にも入れる。
◎3：45 登山口の獣扉まで帰ってきた。「大谷山 2 時間半」と書かれている。ここ石庭から森西まで田園地帯の中を右へ左へ、獣扉を開け閉めして 4:30 ぐらいに車のところに帰り着いた。来た時に登山姿の古賀さん（茨木在住：名刺をいただいた）とお会いしたが、あとはまったく人と会わない山でした。7：30 帰宅。

052　ハチドリ　300620
ノア・ストリッカーNoah Strycker 著＜鳥の不思議な生活 The Thing With Feather＞闘うハチドリ
◎ハチドリを見たことがない。映像では何度か見たが、ホバリングする鳥、きれいな色の鳥、ぐらいしか知らなかったが、「喧嘩ばかりの嫌な鳥」とは知らなかった。これからは、映像でホバリングしながら花の蜜を吸う姿だけを楽しもう。
◎ハチドリはとても小さく、2～20ｇぐらいだそうだ。アメリカ人の著者の先生、ハチドリの重さの話、たとえ話をされているが、読むほうのオレには、「なんのことだ　もっとうまく　解説してくれ」とぼやきたくなる。というのは、この鳥の重さを郵便切手代で話されている。アメリカ国内の切手代がいくらなのか知らない外国人にとって、きわめて迷惑なたとえ話だ。キューバに棲むマメハチドリは、重さはプリンター用紙の 1/3、最低料金で 16 羽も郵送できる。330 種のうち、最大のアンデスの森林に棲むオオハチドリでも普通郵便で送れる。
◎アメリカの普通郵便料金、重さ制限、これはいちいち調べなければいけない。アメリカ人だけが読む本なら致し方ないけれど、外国語に翻訳する時には、郵便料金の決まりごとぐらい載せてほしいね。ネットで調べようとしたが、インチ、ポンドと出てきたので、またそのうち・・。
◎カブトムシ 10ｇ　テントウ虫 0.05ｇ　蝶 0.1ｇ以下　ヤンマトンボ 1ｇ
◎ハト 300ｇ　カラス 500～800ｇ　ホシガラス 200ｇ　ツバメ 20ｇ　スズメ 25ｇ
◎ノドアカハチドリは、メキシコ湾を超え、800ｋを 24ｈで飛ぶ。時速 33ｋで 24 時間ノンストップ、すごい。
◎ハチドリの敏捷性にヒントを得たアメリカ国防総省は、「ナノ・ドローン」を公表した。実物そっくりの二枚翼の空飛ぶロボットだが、問題点はバッテリーの寿命がすぐに尽きてしまうことだ。
◎エネルギーという意味では、ハチドリは物理的可能性の瀬戸際を生きている。動物は、熱やエネルギーを皮膚を通して放出する。小さい動物は、体積のわりに表面面積が大きいので急速に熱を失う。反対に大きな動物は、熱がなかなか逃げないため、表面積を増やして余分な熱を捨てている。北極南極に近づくほど動物は大型化するのは、大きな動物は寒さに強いということなのだ。＜ベルクマンの法則＞
◎ハチドリより小さい多くの動物は、冷血動物として決まった体温を維持せず、体温損失に束縛されない。
◎ハチドリは身体に比べ大きな心臓をもち、心拍数も 1200 回/ｍ。肺も 250 回/ｍ以上の呼吸で酸素を取り込む。日々、体重と同じ重量の蜜を摂取する。
◎最後に嫌な話だけれど。ハチドリの餌づけをしいる人たちは知っているが、ちっともかわいくない。「思ってもいなかった　彼らの暴力を見て　ショックだ」嘴は柔らかく繊細、脚も枝を掴むのがやっとぐらいで強くない、なので組んずほぐれず、ぼろぼろになるまで、やめることなく闘争するという、非社交的な鳥のようだ。

＜安威川河原のベンチに座って＞

つばめが　飛び交う　目の前を
あれれ　今はゼロ　また顔を上げたが　またゼロ
一羽いた　さきほどまで　五六羽いたね
ばたばた　ひゅー　すいー　ひゅー　回転　上へ　下へ
つばめ　特急列車があった　子ども時代だった　今もあるのかな
だったけど　早くないな　しゅーん　ではないな
かえる　ぼうぼう　とらっく　ががが
あれれ　耳をすませば　虫の鳴き声が聞こえてる
オレの　耳鳴りじゃないよね
この音　なんと表現しようか
じじじ　げ～げ～　ごろごろ